

第 272 回月例情報市場

2026.9.16 ふれあい福祉センター4 階会議室

司会:会長 込山

第 272 回情報市場では、参加団体・個人が自己紹介と活動紹介などを行い、長野地域難聴者の会ラ・ビット、ボーイスカウト長野第 1 団、長野クリーンプロジェクトなどのボランティアグループ、天空の里いもい農場が参加され交流を深めた。

ラビット講演会と耳マーク啓発事業の説明

長野地域難聴者の会ラ・ビット 代表宮崎さんは、ささえあい応援金 10 万円を受け、約半額を講演会に使う計画を説明した。11 月 1 日大豆島公民館で、難聴当事者の所智子さんを招き、聞こえにくさと共に明るく生活する工夫をテーマとした講演と意見交換を行う予定である。会場ではスクリーンへの要約筆記表示、手話通訳、ヒアリンググループの設置を企画している。

会場を福祉施設ではなく公民館としたのは、一般の人にも来場しやすくするためである。宮崎さんは、高齢による難聴では、補聴器で音量を補っても言葉の明瞭さが戻るわけではない点を説明し、当事者だけでなく家族や周囲の人にも参加してほしいと呼びかけた。

残る約 5 万円は耳マーク啓発パンフレットとカードの作成に充てる予定である。カードには「筆談をお願いします」「手招きしてください」「手話が必要です」等の配慮を示し、病院の待合室などで本人が必要な支援を伝えやすくする狙いがある。制作は栗田園の B 型就労施設に依頼しており、完成品は講演会会場で配布する予定とされた。

講演会の配布・取材・資金面に関する意見交換

ボランティアセンターの西澤さんは、大豆島の総合センターでも案内したいとしてチラシ 20 部程度を希望し、後日用意することになった。報道については、長野市から報道機関 21 社へチラシを送付済みであり、信濃毎日新聞の記者からは取材意向があると報告した。

当日の大きな事件や競合するニュースによって取材が流れる可能性があるため、一度の送付だけでなく、記者への継続的な働きかけが必要と助言あり、宮崎さんは広報に力を入れると応答した。

見えにくさ・聞こえにくさと当事者理解

参加者の方は、ロービジョンの特性があり、手話に関するディスカッションで手指の動きが見えず、障害の種類や程度によっては同じ場でも参加しにくさが生じる経験を共有した。外見からは分かりにくい困難を持つ人が、配慮を求めること自体にためらいを感じやすい点で、ラビットのカードは有用だと評価した。

宮崎さんは、聴覚障害者のうち手話を使う人は一部で、難聴者を含めた多くの人が十分に理解されていないと説明した。ボランティアセンターの西澤は、福祉教育では「聴覚障害＝手話」となりがちであるが、手話を主な手段としない人を含め、どのようにコミュニケーションを取るかを扱う必要があると述べた。

本田さんは、複数人での会話では情報だけでなく雰囲気や感情の共有が難しくなり、当事者・周囲双方に孤立感が生じると指摘した。宮崎さんは、職場で朝礼や重要事項をメモで渡してもらえることで働き続けられている経験を紹介し、文字化や音声認識などのツールに加え、それらを使いやすくする周囲の理解が重要だと述べた。

ボーイスカウトの屋外避難体験

ボーイスカウト長野第一団の中島さんは、10月4日に一般向けの屋外避難体験を開くと案内した。テント内で過ごす体験や、災害時の課題となるトイレの使用体験を予定しており、団員以外も対象とする。主な対象は女子もOK、幼稚園児から小学3年生程度だが、それ以外の参加も可能で、参加費は無料と説明した。

中島さんは、体験を楽しんでもらうことを第一としつつ、保護者がボーイスカウトの活動に関心を持ち、将来的な入団につながればよいとの考えを示した。また、今後の助成金申請に向けては、情報市場で他団体の活動を聞きながら、自団体が資金を得て実現したい事業を整理する必要があると述べた。

川合新田団地のコミュニティガーデン相談

上井さんは、約 50 世帯の川合青年団地で、自治会予算を得てコミュニティガーデンを開始したと報告した。単身者、外国由来の人、日本人が概ね 3 分の 1 ずつ暮らし、新しい住民も多い中、交流のきっかけとして土いじりや月 1 回のお茶会を実施している。しかし、参加者は以前からの知人に偏り、掲示板や子ども向けチラシを出しても新規参加につながりにくいことが課題となっている。

西長野の信大さくら教室が手掛けている「すけろくガーデン」や飯綱町の幼稚園の園長先生が手掛けているコミュニティガーデンなど、先行事例の運営者に参加者を集める工夫を聞くことを提案した。また作業後に反省会を兼ねてお茶を飲む流れをつくると参加しやすくなるのではないかと助言があった。男性には役割や参加の口実が必要な場合があること、立派に見えすぎる広報はかえって参加をためらわせる可能性があること、集めることを目的にするより自然に集まる楽しい場をつくることが重要との意見が出た。

長野クリーンプロジェクトの活動展開

戸矢崎さんは、長野市内の清掃活動をしている。力を入れているのは中山間地の人手不足の手伝い。現在取り組んでいる地域での活動を 20 日に今年度最終回として実施する予定であり、地域住民との結び付きが深まったと報告した。この経験を生かし、今後は大岡地区や小田切地区など他地域でも活動を実現したい考えを示した。

人手が不足する場合には、県立大学の学生や高校生にボランティア参加を呼びかけられている。参加学生は農作業や地域の人との交流に関心を持つことが多く、地域側と学生側の双方に利益のある関係になっているとの説明があった。また、長野市内のアンダーパス等にある落書きを落として塗り直す活動についても、市の道路担当部署等と連携して取り組むことを今後検討したいと述べた。

助成制度・団体情報の共有と閉会

ボランティアセンターの西澤さんは、長野市まちづくり活動支援事業の助成募集を紹介した。初回申請では補助率が 10 分の 7 であり、例えば 100 万円の事業には 30 万円の自己資金が必要で、補助上限は 70 万円と説明した。助成金だけに依存せず、本の回収、段ボール・空き缶の資源化など、自団体で資金を得る工夫も必要との意見が共有された。

事務局からは、長野地区 BBS 会による非行少年の再犯防止・立ち直り支援ボランティア募集、長野県地域生活定着支援センターによる累犯障害者・高齢者支援セミナーが案内された。芋井地区の神代桜保存活動については、SBC ラジオの 30 分特集が 9 月 21 日まで radiko で聴取可能であることも共有された。



次回

10 月 21 日(水)16 時～17 時 ふれあい福祉センター 4 階会議室